

令和 5 年 5 月 12 日現在

機関番号：32663

研究種目：若手研究

研究期間：2018～2022

課題番号：18K12469

研究課題名(和文)医療英語教育現場における、共通語としての英語による診療面接の分析

研究課題名(英文)An Analysis of Medical Consultations in English as a Lingua Franca: The Cases of Medical English Classroom

研究代表者

野澤 佑佳子(Nozawa, Yukako)

東洋大学・国際観光学部・講師

研究者番号：30737771

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 1,400,000円

研究成果の概要(和文)：本研究の目的は、共通語としての英語を用いた診療面接において、医師と患者がどのように意思疎通をはかっているのかを明らかにすることである。特に医学生側が相互理解構築と共感の伝達のために用いる会話ストラテジーに焦点をあて、詳細に会話分析を行った。主な成果は次の二点である。1) 診療面接の初期段階では医師側は患者の身体的症状に関する情報収集に注力し、相互理解構築のための会話ストラテジーを多用していた。2) 診療面接が進むにつれて医師側は患者側の感情に対して共感を示すようになり、診療の中・後期段階ではその表現はより明示的なものへと発展した。本研究の成果については8件の国際学会発表と3件の論文発表を行った。

研究成果の学術的意義や社会的意義

本研究の成果は1) 共通語としての英語という観点から医療英語教育現場における診療面接の医師と患者の意思疎通の分析を行い、その実態を明らかにした点と2) 診療面接が進むにつれて医師側の共感の表現がより明示的に変化してゆく過程を会話分析により明らかにした点である。1) については共通語としての英語における意思疎通及び医療教育現場における診療面接での医師-患者間の意思疎通の研究は存在するものの、双方の観点から調査した前例はない。2) については少数の量的研究によって指摘されていたが質的研究によってその過程を明らかにした事例はない。この二点により、本研究の成果は意義深い。

研究成果の概要(英文)：The objective of this study is to investigate the communication between student doctors and simulated patients during the medical consultations in English as a lingua franca. Specifically, the study is designed to explore how the participants co-construct the mutual understanding and empathic communication. The data is analyzed within a conversation analytic framework. The prominent findings are; 1) At the early phase of medical interview, the student doctors tend to focus on gathering bio-medical information of the patients, and thus use the strategies for co-construction of mutual understanding. 2) As the medical interview proceeds, the student doctors attempt to express their empathy in response to the patients' emotional expressions, which becomes more explicit in the later phase of the consultation. These findings were presented as the eight presentations at the international conferences and three research papers. The researcher is working on another two papers to be published.

研究分野：応用言語学

キーワード：共通語としての英語 共感の表現 会話分析 医師と患者のコミュニケーション 医学英語教育

1. 研究開始当初の背景

本研究はコロナ禍以前の日本の社会背景とその医療現場への影響を鑑み、計画された。当時はグローバル化により、各国の医療現場にはインバウンド需要、アウトバウンド需要の両方への対応が迫られており、所謂ポスト・コロナ以降はこれらの需要が回復し、コロナ前以前の対応が求められると考えられる。インバウンド需要においては、年々急増する外国人・移民への医療現場での共通語としての英語 (English as a lingua franca、以下 ELF) による対応である。当初は米国の医療機関をモデルとした医療通訳の整備も急がれていたが、国内の医療教育現場では通訳の整備の難しさから、医師自身が英語で患者に対応するためのカリキュラム改革が進められている (医学英語ガイドライン, 2010)。対して、アウトバウンド需要とは、特に教育・研究機関では海外の医学校との連携プログラムへの参加である。特に 2010 年代以降医学生の海外臨床プログラムへの参加が奨励され、ELF コミュニケーションを行う国や地域への派遣も活発に行われているが、医学英語教育現場が求めている、理解度や共感性を表現する会話ストラテジーについての既存研究は未だ英語母語話者の基準や視点によるものが多く、ELF コミュニケーションに必ずしも応用できるものではない。このような背景から、本研究では診療現場における ELF コミュニケーションの実態把握が急務と考え、医療教育現場における日本人医学生と外国人患者との診療面接の場面において ELF コミュニケーションの問題点とその解決策を明らかにする研究の必要性を認識した次第である。

研究開始当初、診療面接における医師と患者の相互理解の重要性と意思疎通上の問題点については、主に母語話者同士のコミュニケーションについて過去 30 年以上にわたる研究の結果、主に以下の点が明確化され、指摘されていた。

- 1) 患者中心の医療を行うことが相互理解を促進し、医療行為の結果に多大な影響を与える。
- 2) 医師と患者の非対称的な力関係が患者中心の医療をしばしば妨げる。
- 3) 医師側が患者への共感を伝達することが患者中心の医療の実現に大きく貢献する。
- 4) 医師側が用いる特定の言語表現および非言語表現が相互理解と共感性の伝達に影響する。

特に 4) 医師側が用いる特定の言語表現および非言語表現については、主に西欧において診療面接の会話の分析のために開発された The Roter Interaction Analysis system (以下 RIAS) が中心的な分析ツールとして用いられ、患者の満足度に影響を与える医師側の言語行為 (Speech Act レベル) や発話の内容が分類され、明らかにされた。しかしながら、これらの言語行為や発話内容を表現する言語的及び非言語的特徴は英語母語話者同士の発話の観点から定義づけられており、英語非母語話者同士で言語文化を異にすることが多い ELF 話者のコミュニケーションに応用可能かどうかは不透明であった。また、ELF 話者のコミュニケーションにおいて医療教育現場での医師・患者間の意思疎通についての実態研究については前例がなく、同様に医療英語教育分野でも ELF の観点から質的に診療面接の意思疎通の分析を行った研究は前例がなかったため、本研究を計画した次第である。

2. 研究の目的

本研究の目的は、医療現場での日本人医師 - 外国人患者間の共通語としての英語 (ELF) での意思疎通の実態について調査することである。言語文化の異なる医師と患者による協力的な意思疎通の過程や、その構築に用いられる会話ストラテジーについて、主に 1) 医師側が患者側の発話内容や意図を正確に理解するために用いるストラテジー、2) 医師側が患者側に与える印象に影響する会話ストラテジー、特に協力的な関係性の構築及び患者中心の医療に寄与するとされる '共感' を表す言語的要素を解明することである。分析を進めるにつれ、面接の初期段階と中・後期段階においてこの 2 点について用いられるストラテジーに変化が観察されたため、初期段階と中・後期段階に分けてそれぞれ詳細に会話分析を行い、その変化の過程を調査した。また、この点について裏付けを行うため、海外臨床プログラム経験者にインタビュー調査を行い、被験者がどのように共感の定義を経験的に構築するのかを明らかにするための調査とした。

3. 研究の方法

本研究は、千葉大学医学部医学教育研究室にご協力を頂いており、研究開始初年度までにデータアクセス及び研究開始に必要な倫理審査の手続きを終え、協力先及び研究者自身の双方の大学から承認をいただいた。診療面接における会話データについては、調査対象の医学英語アドバンストクラスにおいて全ての授業が録音・録画されているため、また、インタビュー調査についても被験者の選定や許可を得る手続きが済んでおり、調査を開始した。

研究開始当初に定められた、学術的背景から導き出される本研究課題の核心をなす学術的「問い」は、診療場面における、医師に求められる ELF コミュニケーション能力の解明であった。本研究は、この問いを明らかにするために特に以下の三点について調査を行った。1) 診療面接において ELF 話者同士の理解を妨げる言語的・非言語的特徴は何であるか。2) 誤解を未然に防ぐ、

または誤解を修復する会話ストラテジーは何か。3) ELF 話者同士が共感を伝達できるストラテジーは何か。以上三点の問いの解明のため、診療全体の会話分析、観察、模擬患者及び海外臨床経験者へのインタビューという経験的・実証的な手法をとり、検証を行った。

4. 研究成果

研究開始当初より、本研究は以下の三点において独創的であった。第一に、ELF 使用の実態録画・録音調査を医学教育教室における診療場面の実習現場で行ったという点である。ヨーロッパ・アジア諸国における先行研究では主にアカデミック・ビジネスの場で会話データを収集したコーパスによる研究が多いが、診療現場及び医学教育現場でのコミュニケーションの場面全体を分析したものはほとんど見られない。国内における先行研究ではビジネス・大学教育の現場において実際に起こっているコミュニケーションについての研究が行われており、研究期間中に ELF における医療現場での意思疎通に関する研究が少数発表されたが、医療英語教育場面において ELF での診療場面を実際に録画・録音し、会話分析の手法を取り入れて、診療中の会話全体について詳細な質的分析を行っている研究はほとんど見られなかった。第二に、ELF の視点から診療面接での意思疎通を調査したという点である。研究開始当初、既存の医療英語研究において、ヨーロッパ・アジア諸国における医師と患者の診療場面またはその教育現場を対象とした研究は主に母語話者同士の意思疎通または英語母語話者の観点から量的に研究しているものが多かった。また、質的研究においても母語話者同士の問題点や英語母語話者の観点からの問題点に限定されるため、英語非母語話者同士の意思疎通、つまり ELF コミュニケーションにおける問題については明確な解決策が得られていない状態であった。この点については研究期間中に異文化コミュニケーション能力の観点からの研究が新たに生まれたが、詳細な質的研究はほとんどなく、文献研究にとどまるものが多かった。第三に、医療英語教育と連携して研究を行った点である。本研究は教育現場と緊密に連携・協力したという点である。また、ELF コミュニケーションの視点から詳細な分析を行うことで教育現場に実践的かつ具体的な提言を行うことができる点においてその成果は社会的にも意義深い。

学術的な成果として意義深い点は、以下の三点である。1) 診療面接が進むにつれて医師側の共感の表現がより明示的に変化してゆく過程を会話分析により明らかにした。この点については過去に英語母語話者の医療教育場面での意思疎通、特に共感の伝達に関する少数の量的研究によって指摘されていたが、質的研究によってその過程を明らかにした事例はない。2) 海外クラクシップ経験者へのインタビュー調査から、どのように医師側が臨床において経験的に共感の定義とそのストラテジーを構築してゆくのかを追調査として行い、明らかにした。(2023 年度論文発表予定) 3) 研究開始当初に指摘しているとおり、用いられる会話ストラテジーについては必ずしも英語母語話者同士でのみ共有されるものではなく、ELF 話者同士が協力的な意思疎通を構築する際に用いる会話ストラテジーが多用される場面が多いという点を解明した。これらの成果はこれまでの先行研究では前例がないため、本研究は各分野の発展に貢献することが期待され、学術的にも意義深いものと結論づけられる。

成果報告として、8 件の国際学会発表と 3 件の論文発表を行った。このうち 1 件は追調査の内容についての国際学会 1 件での発表が含まれており、今後論文としても発表予定である。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計1件（うち査読付論文 1件 / うち国際共著 0件 / うちオープンアクセス 0件）

1. 著者名 Nozawa, Y., Yamauchi, K. and Salcedo, D.	4. 巻 17
2. 論文標題 'Empathy' in English as a Lingua Franca: How student doctors solicit concerns from simulated patients by turn-taking.	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 Journal of Medical English Education	6. 最初と最後の頁 97-99
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

〔学会発表〕 計6件（うち招待講演 0件 / うち国際学会 6件）

1. 発表者名 Yukako Nozawa
2. 発表標題 The Use of Utterance Completions in Delivering Cognitive Empathy in English as a Lingua Franca: A Case of Simulated Medical Consultations in Japan.
3. 学会等名 The 17th International Pragmatic Conference（国際学会）
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 Nozawa, Y.
2. 発表標題 The Role of Explicitness in Empathic Communication during Medical Interview in English as a Lingua Franca
3. 学会等名 The 16th International Pragmatics Conference（国際学会）
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 Nozawa, Y., Yamauchi, K. and Salcedo, D.
2. 発表標題 "Is it necessary?" - How student doctors address patients' concerns during simulated medical consultations in English as a Lingua Franca.
3. 学会等名 The 11th International Conference of English as a Lingua Franca（国際学会）
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 Nozawa, Y., Yamauchi, K. and Salcedo, D.
2. 発表標題 'Empathy' in English as a Lingua Franca: How Student Doctors Solicit Concerns from Simulated Patients by Turn-Taking.
3. 学会等名 The 21st Academic Meeting of the Japan Society for Medical English Education. (国際学会)
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 Nozawa, Y., Yamauchi, K. and Salcedo, D
2. 発表標題 The Embodiment of Empathy in ELF: A Case Study of Primary Care Consultation between Student Doctors and Simulated Patients in Medical English Classroom.
3. 学会等名 The 51st Annual Meeting of the British Association for Applied Linguistics. (国際学会)
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 Nozawa, Y.
2. 発表標題 The Role of Repetition during Medical Consultations in English as a Lingua Franca: Conveying Empathy and Ensuring Intelligibility.
3. 学会等名 The 8th Waseda ELF International Workshop and Symposium. (国際学会)
4. 発表年 2019年

〔図書〕 計2件

1. 著者名 Tweedie and Johnson	4. 発行年 2022年
2. 出版社 Cambridge Scholars Publishing	5. 総ページ数 215
3. 書名 Perspectives on Medical English as a Lingua Franca	

1. 著者名 Konakahara, M and Tsuchiya, K.	4. 発行年 2019年
2. 出版社 Palgrave Macmillan	5. 総ページ数 384
3. 書名 English as a Lingua Franca in Japan.	

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
---------------------------	-----------------------	----

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------